

インド・ネパールにおける伝統建築の技法と伝承

高橋 貴

本研究では、インドのケーララ州とラジャスターン州、ネパールのクンプ地方の3か所で約1か月ずつ調査を行った。目的はそれぞれの伝統建築にみられる特徴、技法を明らかにし、それが今日どのように^{へんぼう}変貌しつつあるかを探ることにある。

1. インド・ケーララ州の家屋

1-1 はじめに

ケーララ州はインドの最南端に位置し、しかも西ガーツ山脈によって他の州から隔絶されている。そのためヒンドゥー教の浸透が8世紀ごろと遅く、ナンブーディリ・ブラーマンは武士・農業カーストであるナヤールと縁組しながら勢力を拡大していった。異なるカースト間の婚姻がどうして可能になったのか。両者の家族・親族制度がこれを解くかぎをにぎる。

両者はマナないしタラワドと呼ばれる大きな家に大家族で住んでいた。ナンブーディリは父系制で、その長男は結婚して財産を相続する権利を持っていたが、次三男にはそのような権利はなかった。他方、ナヤールは母系制で、子どもたちは母方で育ち、その財産を継承した。ナンブーディリの次三男とナヤールの娘が結婚すれば、前者には養育などの負担は^{はく}いっさいなく、後者には上層カーストとの婚姻ということで、箔がつく。60~70年ほど前まではこうした婚姻関係がしばしば見られ、その舞台である大家屋も充分に機能していた。

ナヤールの家屋は1~2階建てで、中央に屋根のない中庭がある。このまわりに小さい部屋が並ぶ。女性たちの個室である。中庭に面した廊下には太い柱が立ち、門扉もりっぱであった。広いベランダでは昼はお客を接待し、夜は男たちが寝た。屋敷内には井戸、沐浴用の池、ナーガ(蛇神)をまつる石などがあり、とくに女性たちは屋敷内で1日の大半を過ごしていた。カルナヴァンと呼ばれる年長の家長を中心に、十数人の母系メンバーが共同生活をしていたのである。ところが今日、母系制度、大家族制度は崩壊し、それにとまって大邸宅が家族ごとに分割されたり、少人数で住むなど、昔日のおもかげはなくなってしまった。解体し、消滅するのも時間の問題である。ナンブーディリの家屋も似たような状況にある(図1-1)。ここではこうした大家屋に見られる理念

と技術を中心に述べていくことにしたい(ナヤールの家については、高橋貴「ナヤールの結婚と相続」リトルワールド研究報告10号、1989などを参照)。

ケーララにはこの他たくさんの中・下層カーストが住む。カルワン(かじ屋)、アサリ(大工)、チュッティヤ(はた織り)、タンダン(ヤシ酒づくり)などである。こうした家々はもっと小規模で、部屋は1~3室でいどしかない。つくりも簡素である。このタイプの家屋については適宜言及するにとどめたい。

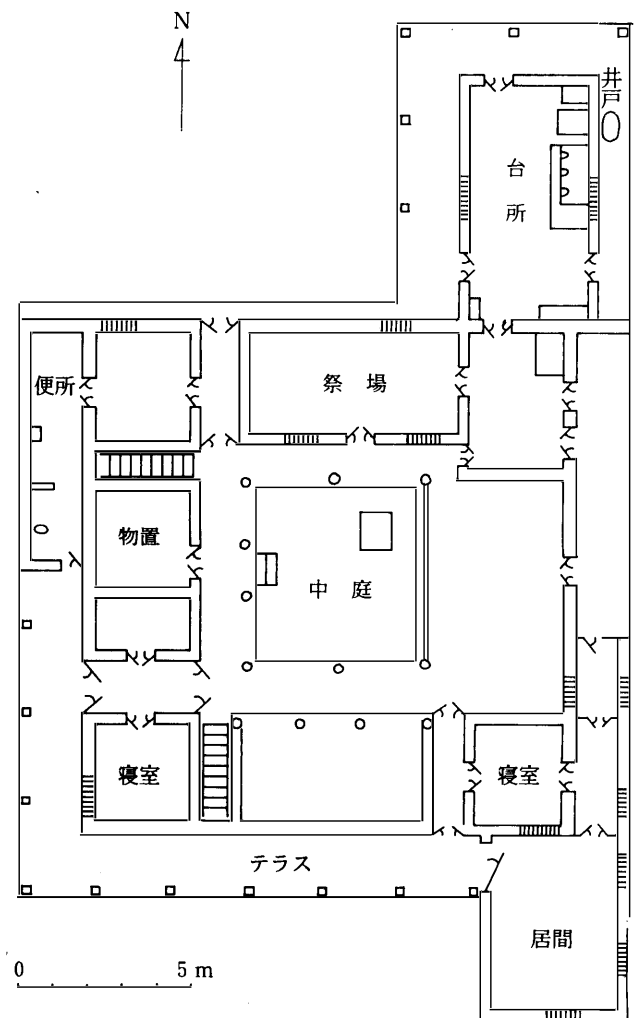


図1-1. ブラーマンの家・1階平面図(ワダカンジェリ)

1-2 伝統的な建築理念

家屋を建てる時は、まず家相の専門家タッチ・アシャリに相談する。彼は屋敷の形状に応じて家屋の位置、大きさ、間取り、屋敷配置などを決める。その方法は複雑であるが、マヤヤーラム語の建築書マヌシア・チャンドリカも参照しながら整理すると、つぎの通りである。

まず考慮するのは屋敷地の神ウァーストプルシャン(ウァツ)である。この神は頭を北東、足を南西に向け、あおむけに寝ている(図1-2)。家屋はこの神の胸か下半身のところに建てるものとされる。胸のところならば子孫は増えて家は繁栄し、下半身のところならば望みがかなうという。反対に左腕のところに建てる、家は火神アグニによって焼かれ、右腕のところならば風で倒壊する。いいかえると、家屋は北東から南西の線(カルナ・スートラム)の上に建てるべきものとされる(図1-3)。その際、中庭ナドミットムの中心がその線上にこないようにする。カルナに限らず、ムルティ、ブラフマ、ヤマの線上に家屋や付属施設の中心を設けることは良くないとされるからである。

これらのタブーは、8つの方位とその守護神に関する。方位観が屋敷配置を決める上での基本になっているわけである。たとえば、東は太陽の神インドラの方角であり、その恵みを得るために門や家の入口は東を向く。さらに恵みを家の中に迎え入れるため、東西の線ブラフマ・スートラムの上には壁などの遮蔽物をつくらない。家屋ではその位置に出入口や窓を設けたり、屋敷地の裏門を設けることもある。同様にカルナ・スートラムの通る壁には小さな穴をあけておく。これは悪霊が通るとも勇者カルナが通るともいわれている。

これと対照的なのは南である。南は死の神ヤマのいる方角で、死と深く結びついている。たとえば、人が死ぬと南枕で寝かされ、家の南側の屋敷で火葬にされる。この他、死と反対の出産や月経の忌みごもりが西北の部屋で行われ、水と関係する北東に井戸や台所が設けられるのも方位観と関係がある。

家相の専門家はまた、屋敷を入れ子構造の9つの区画

に分ける。内側からブラフマ、ガネシャ、アグニ、ジャラ、ナーガ、ヤマ、クベラ、デワ、ピシャーチャという神名で呼ばれる。このうちアグニ(火事にあう)、ナーガ(蛇にかまれる)、ヤマ(死ぬ)、ピシャーチャ(食われる)の区画に家を建ててはいけないとされる。

屋敷を45や81の升目に分けて判断することもある。これは、ヴェーダの時代からみられる聖域を表す図で、今でも建築のときだけでなく、寺院の儀礼や結婚式などにも使われる。土地の高低やかたちなどで好ましくない点があったときには、つばにコメを入れて敷地に埋める儀礼が行なわれる。

家のサイズは、伝統的なスケールであるコル、ヴィダで表される。1ヴィダはコムギ8個をたてに並べた長さないし指2本分の幅で、約3cmである。1コルは24ヴィダで、約72cmになる。この組合せで、家の周囲の大きさを40-8, 56-8, 71-0, 79-16などと表す。これが決まれば、後は自動的に家の高さや幅が決まる。部屋の間取りや大きさもこのスケールでだされる。ちなみに、ものさしは0.5ないし1コルの長さのものが使われる。身体寸法としては、親指と人差し指の長さチャン(=1/4コル)、手の先からひじまでの長さモラル(14ヴィダ)がある。

1-3 構造

家屋は、中庭を1つ持つナーリカタ・タイプが一般的である。中庭が2つあるエトゥカトゥ・タイプは王族クラスの大邸宅にしか見られない。中庭は重要な儀礼空間で、とくに死者供養の儀礼が行なわれる。

家屋はまず基礎と基壇がつくられる。この上に木材で入口柱と窓柱をつくりながら壁を建て、中庭側には柱を立てる。これらの上に木材で小屋組をつくり、瓦を葺く。壁塗りをし、床を仕上げで完成する。

基壇と壁の材料は主としてラテライトが使われる。これは固くなった赤土を斧でれんがが状に切りとったものである。大きさは16×12×4, 12×10×4, 10×8×4(単位はヴィダ)などあり、それぞれ基礎、1階の壁、2階

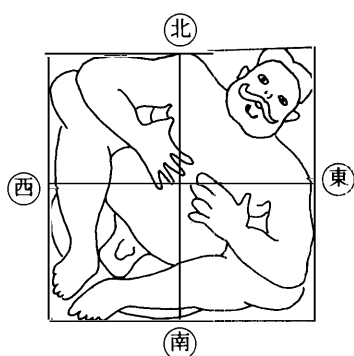


図1-2. ウァーストプルシャン

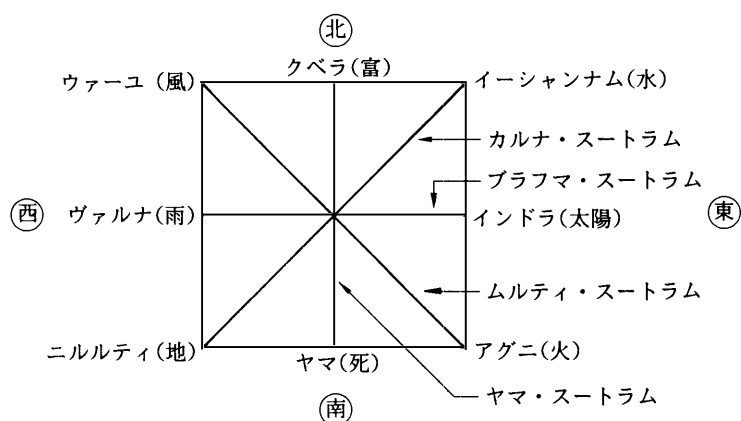


図1-3. 八方位と守護神

の壁に使われる。つまり上にいくほどラテライトは小さくなる。壁のつなぎは、泥を水と混ぜ、ここに棉の皮を水に1晩つけた液体と、パルミラヤシの木からつくった粗糖を加えてねばりけをだしたものをを用いる。壁の表面はそのままでもよいが、石灰1、砂4の割合で混ぜて仕上材とする。ラテライトは塀、井戸枠、通路などにも利用される。農業にはやっかいものであるが、建築材料としては重宝なものである。掘り出す作業は壁づくりをする左官か日雇い人夫が行なう。他人の土地で採掘するときには、所有者にその1/10を支払う。

木材は、柱がティークやジャックフルーツ、入口柱や戸がイルムル、小屋組がココナツヤシである。このうちティークやイルムルは州政府に登録されており、伐採するには許可を必要とする。材木の加工はかなり精巧である。入口の扉や上部のかまちはしばしばすばらしい彫刻が彫られるし、中庭に面する柱は綺麗な円柱形をしている。また天井は格子状になっているが、これは長短の木を巧みに組み合わせてつくったものである。

床はつぎのようにしてつくる。水田からとった粘土に少しの牛糞を混ぜて水でこね、2～3インチの厚さに敷きつめる。牛糞は床を清浄にするとともに虫が穴をあけたりするのを防ぐ。石のローラーで丁寧にならす。乾いてからココナツ殻を燃やしてつくった炭をまき、布でみがく。こうしてつくった床は毎日ほうきで掃いた後、水をまいてから布でふく。そうすると、でこぼこがなくなり、ふたたび平らになる。鏡がいらなくらい綺麗だというが、すべることはない。また、暑い盛りにそのまま寝るとひんやりしてたいへん気持ちが良い。現在は石灰と化学塗料が使われ、色も黒と赤が用いられる。この場合は水があるとすべりやすい。

ここで、中・下層の家屋について述べてみよう。屋根は瓦もあるが、藁かヤシの葉が多くなる。藁の場合、段葺きとそうでない2種類の葺き方がある。作業は、経験のある男2名と手伝いの女2名で行なわれる。女は下で藁束を用意し、男は屋根に乗って軒先から葺いてゆく。3段目ごとに棒で藁を押さえてツタで留める。棟はかんざし状に並べた竹の上と棟の頂点に藁束をのせ、ツタでしぼる。最後に刈りそろえることをしないので、あまり綺麗な仕上がりではない。3室でいどの普通の家で使用する藁束は、直径10cm弱のもの750束という。作業は1日で終了する。葺き替えは1年に1度、稲の収穫が終わる2～3月に行なわれる。

ヤシの葉はさらに小さい家屋や付属小屋の屋根に使われる。ココヤシの場合は葉を編み、二重にして葺く。これは1年おきに葺き替えるが、そのとき下にあった葉を上、新しい葉を下にする。パルミラヤシの場合はそのままやはり何枚か重ねるようにして葺く。どちらも屋敷まわりに生えている木であり、雨もれなどがあれば即

座に対応できる。

壁についても触れておかなければならない。ラテライトに代わるものとして日干しれんがと泥積みがある。日干しれんがはラテライトとほぼ同じ大きさで、3人1組でつくる。昔のつくり方は凝っていて、粘土、普通の土、粗糖、棉の樹皮、水をよく混ぜて練る。これを型枠に入れて4日ほど乾燥させた。ラテライトより丈夫だったが、もちはあまりよくなかったという。壁の下部にラテライト、上部に日干しれんがというような使い方をした。泥積みは、土にモミを入れて水でこね、2枚の板のあいだに詰める。50～60cmの高さにして乾かしては積んでゆく。この他大理石が塀や寺院の壁に使われるが、普通の家の壁に使用することはなかった。

近年、一般の家屋によく使われているのがれんがである。これには工場製と野焼きがある。前者は土を数回よく練った上で焼くため堅くて品質が良い。後者は水田の跡地で主として農閑期に焼く。値段は安い、品質は劣る。このつくり方は土を水で練って1連ないし2連の型枠に入れ、6日ほど天日乾燥する。乾燥したれんがが7～8万個で、間口、奥行とも6m、高さ4mほどの大きなかまどをつくり、火入れをして2日間燃やす。外側にあって半焼きのものは次回内側に入れて焼く。

1-4 建築儀礼

建築儀礼は大工によって5回行なわれる。最初の儀礼は、建築プランが決まって工事を開始するときで、ガナパティ・プージャと呼ばれる。ガナパティとはガネシャのことで、障害を取りのぞく神とされる。大工は東を向いてマントラを唱え、工事の安全を祈りながらお供えをする。升に入れたモミと米、バナナの葉にのせた押し米とポップライス、ココナツの実、聖水、香、トラシ（めぼうき）の花などである。家屋の東北隅に小さな杭を立てて終了する。これは最初の杭打ち作業で、これから基礎工事が開始される。施主の方から大工に現金と飲み物が与えられる。

2回目もガナパティ・プージャをする。壁を少し積み上げたところで入口の枠を立て、大工はその前でプージャを行なう。内容は1回目と変わらない。入口を支える敷石の下には金、銀、銅、鉛、鉄が埋めてある。

3回目は壁の上に梁をのせるときで、やはりガナパティ・プージャという。大工は東南の壁にのぼってマントラを唱え、お供えをする。

4回目はすべての木工事が終わったときで、マバダ・プージャという。大工は家屋のまわりを3周し、ベランダの壁にのぼる。ニワトリを殺し、その血を振りまいて供物とする。

5回目はクッティ・プージャである。すべての建築工事が終了したときに行なわれる。クッティとは棒切れの

ことで、これを家の東南角に立て、火事や水害のないようにと祈る。たとえ小さな木でも建物には重要、という意味で行なわれる。職人たちには現金・服などが与えられる。この夜はニワトリを料理して宴となる。

引っ越しの時期は占星術師に見てもらって決める。入居して最初にやることは、主婦がココナツの殻で火をおこしてミルクをわかす。家を暖める意味があるという。

1-5 職人

家を建てる場合、まず家相の専門家タッチ・アシャリに見てもらおうということはすでに述べた。家屋の位置、大きさ、部屋割りを決め、図面を描いてもらうのである。工法が現代的になった今日でも、彼らに相談する人は相変わらず多い。ケーララ中部の大寺院グルワユールの近くに有名な事務所があり、いつも依頼人たちで混雑している。

大工はジャーティ（カースト）名をアシャリという。家屋はもちろん家具、農具、台所用具など注文されればあらゆる木製品をつくる。使用する道具はのこぎり、かな、かなづち、弓錐、釘引き、定規、のみ各種、などである。

かじ屋のジャーティ名はカルワンである。入口扉のかぎと飾り、釘、軒先の蛇の飾りなどをつくる。道具はハンマー、たたき台、火ばさみ、やすり、くさび、カッター、のみ、ふいごなどである。

左官はマンナンという。ラテライトの掘出し、壁づくり、床塗りなどを仕事にする。道具はこて各種、垂線をだすためのおもりなどである。

これら職人はジャーティ内婚、つまり、アシャリの男ならアシャリの女と結婚する。生まれた子どもは両親や祖父母の仕事（大工）を見習い、徐々に技術を習得していく。その技術には個人の創意というものはあまり入る余地はなかったが、長い伝統に裏打ちされた機能美といえるものがあつた。とくに大工がつくる円柱やかまちの彫刻、かじ屋がつくる入口の鍵などには、目を見張るものがある。ところが近年こうした技術は子どもに継承されなくなってきた。その理由として子どもの学校教育や都会志向があげられる。たとえば、ある大工は男女各2人の子どもがいるが、現在小学校に通っており、息子が大工になるとは期待していないという。別の大工の場合、小学校を4年で退学し、その後は父親について仕事を覚えたという。2人の息子のうち長男は大工になったが、次男は湾岸諸国へ出かせぎに行っている。また57歳のかじ屋は12歳のときから仕事をしたが、1人息子は卒業後ボンベイへ行き、自動車工場で板金の仕事をしている。自身も伝統的な仕事の仕方をやめ、左官、ヤシ酒づくりの若者と共同して鉄製の窓飾りなど現代の住宅に合うような装飾品をつくるようになった。

職人の報酬は40年ほど前までは米によって支払われたこともあつたが、現在は現金で支払われる。1日当たり大工・左官は50~60ルピー（1ルピー=5円）、日雇いは30ルピーである。技術が優れていても基本的には日当制のため収入は多くない。若者はそれを嫌い、数年契約で高収入の得られる外国へ行ったり、都会でサラリーマンになったりするわけである。

他方で職業訓練校や専門学校も各地につくられており、ここで建築を学ぶ人も多くなった。建築士やシビル・エンジニアの資格をとり、近代的な工法、たとえば鉄筋を使い、フィートを単位にした図面を描く。会社に入るか、個人で独立して事務所を構える。この場合、工事は普通、請負で行なわれる。従来の方法では、建築主が自ら工事の管理を行っていた。家相の専門家のところに行つて図面をつくり、建築期間や懐具合と相談して職人を集め、その仕事ぶりを監視していたのである。材料を調達したり、買つたりするのも自分であった。

上述した学校には低カースト出身者が多く通っている。資格を取得すれば日雇いによる低賃金に甘んじなくてもよい。実際、左官の多くはこのような階層の出身者で占められている。ただし大工は修業に時間がかかるため、アシャリの人々が中心になって仕事をしている。

2. ネパール・シェルパ人の家屋

2-1 はじめに

シェルパは、16世紀にチベットからヒマラヤを越えてソル・クンプ地方に定着した人々で、牧畜、交易、農耕を伝統的な生業としてきた。しかしながら、近年ヒマラヤで登山やトレッキングをする人の数が増えるにつれ、ガイドやロッジ経営に従事する人が多くなった。また自然保護の観点からクンプ地方は国立公園に指定され、その結果種々の制約を受けることになった。このような社会的条件の中で、家屋やそこでの生活がどのように推移してきたか、明らかにするのがここでの目的である。

まずクンプ地方での主な出来事を記してみよう。

16C初	シェルパがクンプ地方に定住
1952	外国隊のヒマラヤ登山解禁
1953	ヒラリーとテンジンがサガルマータに初登頂
1959	チベット・ネパール国境閉鎖
1961	クムジュン小学校開校
1964	ルクラ空港オープン（トレッキング人口20人）
1973	エヴェレスト・ビュー・ホテル完成
1976	サガルマータ国立公園指定
1982	ナウジェに電気がひかれる
1991	トレッキング人口1万2千人

シェルパについて最近書かれた本はこうした歴史の変

化, いかえれば観光化現象を主題として取り扱っているものが多い。たとえばシェルパ研究の先駆者フューラー・ハイメンドルフは, “The Sherpas Transformed” 1984 の中で, 男たちが登山やトレッキングの仕事をするようになった功罪を記している。すなわち現金収入が増え, 住まいや食生活は改善されたものの, 1953年以来116人のシェルパ男性が事故死し, 未亡人や再婚者が増えたこと, これとは逆に成功した男性はカトマンズにも家を建て, 第2夫人をかかえていることなどである。

ルクラ空港の開設と各地の小学校や橋の建設にたずさわったジェイムズ・F・フィッシャー (“Sherpas” 1990) と, 家畜の放牧システムに関する労作を著したバーバラ・ブロー (“Sherpa of Khumbu” 1991) も類似の視点から論じている。

2-2 伝統家屋の特徴

ここで伝統家屋というものは, 観光化以前すなわち20年ほど前までごく普通に見られたものをいう。シェルパ独自の生活様式であった家畜飼育, 交易, ジャガイモ農耕や神観念, 超自然観と結びついている。クンプ地方の中心地ナウジェ (ナムチェバザール) と隣村クムジュン, クンデの例をとり上げる。

(1) 構造

家屋は基本的に2階建てで, 1階が家畜小屋, 物置, 堆肥場, 2階が居住用となっている(図2-1)。家畜はゾッキョで, 今でも交易・運搬に欠かすことはできない。物置にはジャガイモなど農作物, まき, 木材, 不用品を収納する。堆肥場というのは, 2階にあるトイレの落とし部分で, 枯葉を入れて肥料とする。2階は一室で, 向かって右に台所, 左に居間があり, 後側の棚には高価な銅製の容器が綺麗に並んでいる。仏壇は一番奥にあり, 資産家の家では別室になっている。

屋根は石葺きか板葺きである。石葺きといっても石のスレートは壁際である周辺部分にのみ用い, 棟に近い部分は板葺きとしている。荷重のかかる石を中央には用いないのである。屋根の基本的な構造は柱の上にのせた梁, 石壁にのせた桁の上に垂木を渡す。この上に長さ50~60cmの割木をのせ, 上に草を敷き, 土をのせる。この上に石のスレートないし板を葺く。石のスレートの大きさはまちまちで, 枚数を少なく, しかも雨がもらないようにするには技術を要する。板も大きさが一定していないが, だいたい長さ1m, 幅20cmである。上下2枚, 重なりも二重にし, 上には棒を渡して石をのせる。板はそのままにしておくと腐るため, 年1~2回ほうきで掃除した後, 上下ひっくり返す。この場合の耐用年数は4~5年である。

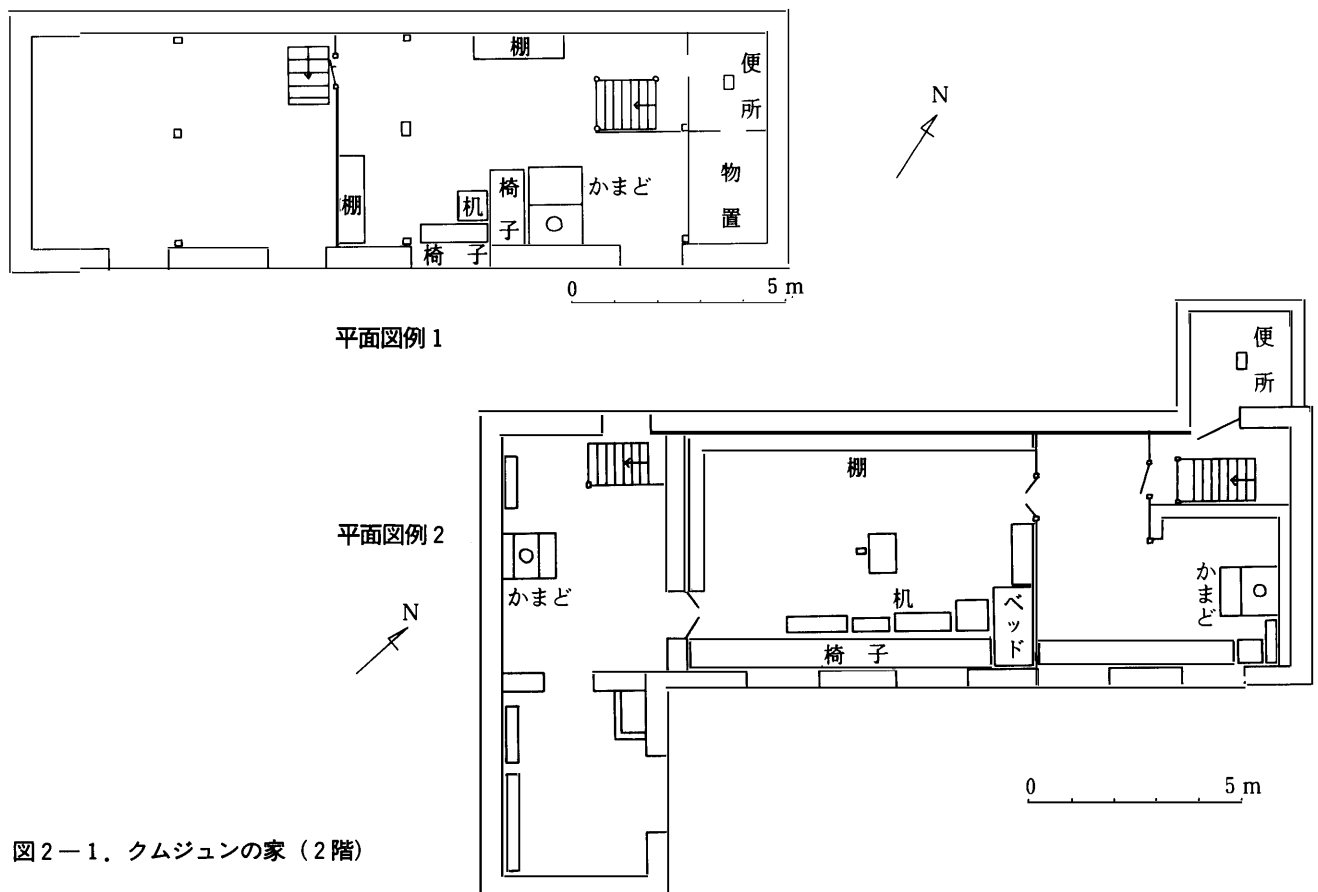


図2-1. クムジュンの家 (2階)

壁は石積みである。石は川原の丸石でなく、岩を叩き割り、適当にのみで削ったものを使用する。水準線を張り、なるべく石が水平に一直線になるように積み上げていく。壁は上部にいくにしたがって薄くしていく（外から見ると内側に傾斜する）。その意味で、角が重要であるが、必ずしも綺麗にはそろってない。つなぎには土に牛糞と松葉を足でよく混ぜたものを使う。表面はそのままか、しっくいに似たものを塗る。これはパクという白い土にヨーグルトを混ぜたものである。柱は2階が角柱、1階が丸柱である。2階の柱のうち、ほぼ中央にあるのが重要で、日本と同様家族を支える主人はこの柱にたとえられる。2階には棟木を支える柱数本しかないが、1階には床を支える多くの丸柱がある。

床は板敷きである。釘を使わずに板にほぞをつけ、他の板をさしこんでつなぐ。50~60年も前につくった家の床板はたいへん大きい。幅50cmの板も珍しくない。柱や梁についても同じことがいえ、かつては大きな木がふんだんにあったことを物語っている。床の構造は屋根のそれと同じである。

(2) 材料、道具

家の材料は当然、自然に手に入るものが用いられた。木、石、草、竹、土などで、このうち竹だけは採りに行くのに2~3時間かかるが、別に難しいことはなかった。柱や垂木に太い木を使うことができたため、重い石のスレート屋根材として使うことができた。鉄はほとんど用いられなかったが、かじ屋による手づくりの鍵が使われることもあった。

職人については、大工がシェルパで、比較的細かい細工をすることができた。ラサ出身のチョーヌルがタンボジェ寺院をつくり、それ以降伝統的な窓タマ(図2-2)がつくられるようになったといわれている。机、壁、窓にこうした技術が生かされることもある。また、釘を使わないため、特殊な木組みも使われた。たとえば、入口

の枠はほぞをあけて斜めに組んだように見せている。木はタウィ(ちょうな)で削っており、少し古い家にはその跡がよく残っている。主な大工道具はトレンバ(かなづち)、サーティル(1人用のこぎり)、アラ(2人用縦びきのこ)、ギルワ(2人用横びきのこ)、ゾン(角のみ)、ザッキョ(丸のみ)、ボレン(かんな)、ティ(墨つぼ)である。

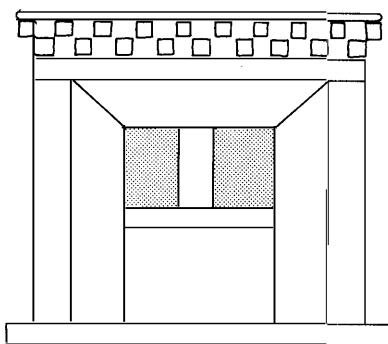
家のサイズはトゥであらわされる。1トゥはひじから手の先までの長さをいい、大きい家は40×14である。この他の身体寸法はソル(親指の幅)、キ(親指~人差し指)、タツ(親指~中指)、カン(ひじ~げんこつ)、ドンバ(両手を広げた長さ)などがある。

(3) 窓と入口

窓は2階に3~4か所、入口は1階に2~3か所つくられる。いずれも正面だけで、左右や後の壁につくられることはほとんどない。窓のつくり方にはいくつかのヴァリエーションがあるが、いずれにしても昔の窓は小さい。なぜ小さいか。理由は2つあげられる。1つは冬の寒さを防ぐためである。かまどの火が唯一の暖房であり、窓はできるだけ小さいほうがよい。煙が室内に充満し、かつては眼病にかかる人が多かった。もう1つは死者に対する恐れである。人は死ぬと外をうろつき、家の中にも入ってくる。そうすると家の者は病気になったり死んだりする。ところが窓を小さくしておく、死者は頭をぶつけてふたたび死んでしまう。死者はまっすぐに立って歩く習性があるためである。しかし、ラマ・トマレという偉い僧侶が祈とうをしてからはそのようなことがなくなり、安心して窓を大きくするようになったという。

死者の代わりにイエティもしばしば登場する。イエティを見たという人は必ずしも多くはないが、伝説は数多く残っている。窓が小さいのは彼らが家の中に入ってこないための工夫なのである。

入口は人と家畜が通るので比較的大きい、やはり死



0 1 m

図2-2. 古いタイプの窓

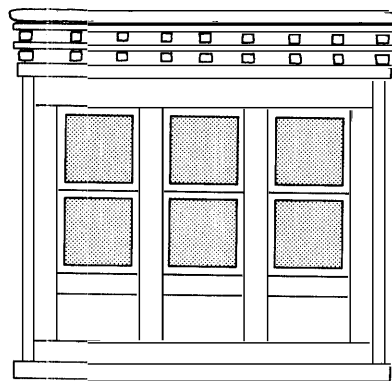
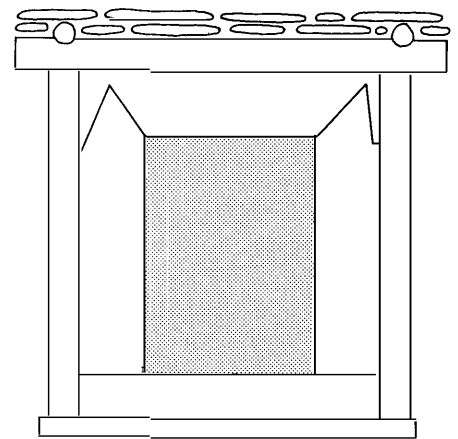


図2-3. 比較的新しいタイプの窓



0 1 m

図2-4. 入口

者やイエティへの恐れから、かつては小さくしていた。図2-4の場合には開口部の高さがわずか130cmである。夜間はんぬきをして戸締まりをする。

(4) 神霊

伝統家屋にはさまざまな霊的要素が見られる。まず最も重要なのは仏壇である。一番奥の棚に釈迦や阿弥陀の像や掛図がまつてある。かつてチベットとの交易でよく大な財産を築いた人の家では、仏間として独立させ、寺院のように壁に仏画を描き、棚に経典を置いている。いずれにしても朝夕、香をたいてお祈りをするし、満月のときにはバターランプを灯したりしている。先祖については必ずしもまつる習慣はないようだが、出生と死亡年月日から特定の絵を描いてもらい、仏壇に置くことはある。

家を支える大黒柱には神々の版画を貼り、カタという儀礼用布、トウモロコシ、ムギなどをくくりつける。カタは家が新築されたとき繁栄を願ってつけ、穀物はその年の初物2~3本をカタにはさむ。お供えをすることはなく、ふだんはそのままにしておく。煤けて黒くなっている家も多い。

かまどには火の神グラがいる。仏画として描かれる像では白い身体をしてウマに乗り、左手に宝物、右手に槍を持っている。まわりにイエティ、オオカミ、イヌ、ヒツジ、ヤギ、ゾッキョ、ヤクなどの動物をしたがえているのがおもしろい。これもとくにお供えをすることはないが、朝早く火をつけて煙を出すのが幸せという。また新年には火を新しくする。かまどでは肉を直接焼いたり、骨、肉、皮を燃やしてはいけなるとされる。

ハーとルーという神霊もしばしばまつられる。ハーというのは天の神で、村や個人でまつる。個人の場合、家の脇に壇と香炉をつくるか仏壇にまつている。

ルーというのは地下の神で、とくに水と関係が深く、水源地にまつられる。家を建てるときにはその地にルーがいるかどうか呪術師じゆじゆつしに見てもらう。ルーがいれば僧侶を呼んで居を移す。土と供物をつぼに入れ、壇をつくって安置する。

家の外には3種類ののぼりを立てる。屋根上には両棟と中央に立て、チョータルという。これは、青、白、赤、黄、緑の5色の旗を竹につけたもので、年3回スンバ月(3~4月)、トゥクパ月(6~7月)、チュワ月(10~11月)に立てる。家の前に立てるのはタルチョーである。5~6mの柱に仏画を印刷した旗をつけたもので、これはひんばんに替えればそれだけ御利益があるとされる。もう1つはゴータルと呼ばれるもので、長子や長男が生まれたときに立てる。葉と樹皮のついた、できるだけ高い木を選ぶ。もし葉がなければ帽子が買えないし、樹皮がなければ服を買えないし、木が短ければ長生きできな

いという。木の先端にはムギやコメを取り付けておく。ゴータルはいったん立てたらそのままにしておく。

魔よけとして家の入口に仏画を貼ったり、とげのついた木をさしておく家も何軒か見かけた。

2-3 家屋の変容

すでに述べたようにシェルパ社会はこの20~30年で大きく変化した。交易や出かせぎに依存する経済から、登山隊やトレッカーに対するガイド、宿泊、小売り、輸送(ウマやゾッキョを利用して)いわゆる観光業に従事する者が多くなった。中にはカトマンズにトレッキング・オフィスをもつ者もいる。

現在の状況をナウジェの例で説明してみよう(数字はいずれも聞き取りのため必ずしも正確ではない)。戸数125戸、人口900人で、このうち約200人が兵士、銀行員など外部の人が占める。ロッジ兼レストランは25軒、土産物屋は18軒である。ゾッキョも200頭ほどいる。私が初めてナウジェを訪れた1973年にはロッジもレストランもほとんどなかった。また村の入口付近は悪霊を追い払う場所とされ、空き地だったが、現在では多くの家が建っている。公共施設も多い。役場、博物館、病院2か所、銀行、郵便局、兵舎、小学校、警察、クラブなどである。また毎週土曜日には有名なバザールが開かれ、行程2~3日も離れた低地やチベットから多いときには400人が店を広げるといふ。自給のジャガイモ農耕のみで産業らしい産業のないこの地に、これだけの施設、マーケットがあるのは驚異である。これを支えているのは年間12,000人(ジョルサレ・チェックポスト調べ)にも及ぶ登山客、トレッカーである。エヴェレスト・ビュー・ホテルにも年間1,000人を超える宿泊客がくるという(この数字は決して少なくない。最高の眺めに立地するこのホテルには専用の飛行機が用意され、宿泊費用もとびきり高い。ホテルの工事、滑走路の補修、ボーイなどこれに依存して生活している人は多い)。シェルパはますます観光業にのめりこんできた。

登山客、トレッカーを迎え入れるため、まず家屋を改造する。せまい土地柄だけに室数を増やすには上に建て増すしかない。かくて3階建て、4階建てが出現した。窓は大きくとり、屋根も丈夫で手のかからないトタン葺きが見られるようになった(今後クンプ地方は5~10年以内にトタン屋根に一変すると思われる)。壁や窓は彩色するなどして美しく見せている。今回調査したのはオフシーズンとあって、あちらこちらで新築、増改築が行なわれていた。

家屋変化のもう1つの重要な要因は1976年のサガルマータ国立公園の指定である。それまで許可の上とはいえ自由に木を伐ることができたが、これ以降は難しくなった。柱や梁など大きな木は新築に際しては6本まで、改

築に際しては3本まで公園局から購入できるが、その他すべての木材は公園外のパグディンマから購入しなければならない。パグディンマからナウジェまでは1日行程で、木材の輸送方法は人の背によるしかない。当然費用もかさむが、かつてのように大きな木を利用した、がっしりした家屋の建築は不可能になった。

職人の質も変化した。シェルパの大工、石工は少なくなった。こつこつと働く職人仕事を避けるようになったからである。代わってマンガルを中心とした山地民がシェルパの仕事をするようになった。大工技術は後退し、入口、窓枠なども簡素になった。そのかわり石積みが丁寧になり、とくに角や目地が美しくなった。また身体寸法は使わず、フィートを使うようになり、家屋の基本的な規格が変化した。

2年前に建ったロッジの例を述べてみよう。大きさは約19×9フィートで、4階建てである。従来の家より幅がずいぶん大きくなった。大工、石工はすべてマンガルだったが、机などの調度だけはシェルパの大工がつくった。壁石の採取はタマンとマンガルで、採取と運搬の費用は1㎡当たり400ルピーであった(3人で1日の仕事量)。ガラスはカトマンズで16,000ルピーだったが、ヘリコプターで運んだため40,000ルピーかかったという。木材は以前に買ったので安く、3m×30cm×4cmの板1枚が100ルピー(今は200ルピー)、根太が200ルピー(今は1,000ルピー)で、建築費用は総計120万ルピーであった(現在家1軒の建築費は100～150万ルピー)。1日30kgの荷を運んで100ルピーもらうポーターの実に33年分、1日170ルピーもらう大工棟梁とうりょうの19年分にあたる。シェルパ(のすべてではないにしても)と山地民の格差は想像以上に広がったといわざるを得ない。

ナウジェのシェルパは特別かもしれないが、生業の変化、経済的地位の上昇は他のシェルパにも影響を及ぼさずにはおかない。たとえばクムジュンでも若者のほぼ全員が登山ガイドになるかカトマンズで同様の仕事をこなっており、現金収入への依存度は高い。その結果、ロッジや店が少しずつでも増えている。ヒューラー・ハイメンドルフも1983年の時点でクムジュンの半数以上の家が観光産業に従事していると述べている。

住まいに対する考え方も異なってきた。まずトイレがどこの家にもつくられるようになった。1973年のときには苦勞してトイレの場所を探したが、今回はそのようなことはなかった。汚物は枯草とすぐ混ぜられるので臭いはないし、肥料としての利用価値も高い。もう1つは部屋に間仕切りがつくられたことである。かつては一間で、窓も小さかったため、かまどの煙が充満していたが、今は間仕切りがつき、しかも排煙装置がついたのでそのようなことはなくなった。眼病をわずらう人も少なくなったようである。この他いつからの傾向かはっきりしない

が、竹のアンペラで天井を張ったり、内壁に板を立てまわすなどしているところもある。ナウジェには1982年に電気がひかれた。来年にはタメに発電所ができ、出力が大幅アップし、クンデヤクムジュンもカバーするという。明るい蛍光灯の下で、ヒーターにあたりながら、冷たいビールを飲むという生活もすぐやってくるのではないかと思う。

このような経済的な変化と住まい方の変化は、神霊に対する考え方の変化と表裏している。仏壇は依然としてまつるものの、かつてのような仏間をつくる人はいなくなった。イエティや死霊への恐れから窓を小さくする人もいない。しかしハーヤルーに対する信仰は根強いし、チョータル、タルチョー、ゴータルなどののはよりは今でもきちんと立てられる。寺院や僧侶に対する信仰もあつい。このような神霊観、信仰内容が今後どのように変化するのかはっきりしないが、そのあり方が住まい方と無関係ではないということだけはできる。

3. インド・ラジャスターン州の家屋

3-1 はじめに

調査したのはインド北西部のラジャスターン州である。この州の西はパキスタンと接しているが、ラジャスターン州内にイスラム教徒は比較的少なく、この州の北部に位置するパンジャブ州に比べればイスラム教徒とヒンドゥー教徒とのあらしは顕在化していない。ラジャスターン州の北部から西部にかけてインド砂漠が広がっている。この砂漠の南縁の町、ファテプール(人口5～10万人)、ピカネール(人口25～50万人)の周辺の村2か所ずつで調査を行なった。どちらも乾燥地域で、年間降水量は400mm以下である。ここに住む人びとは農耕を主な生業としているが、雨季にしか農耕はできない。乾季には砂漠の砂に煙が飲み込まれて、一目では煙と分からないほどになる。インド全体からみてもラジャスターン州の北部は貧しく、経済的發展は遅れている(ラジャスターン州南部は年間の降水量が800mm以下と、降水量は北部に比較すれば多いが、やはり経済的發展は遅れている)。

3-2 家の各部の特徴

ここでは家の各部の特徴について述べ、ラジャスターン州の村の家の概観を示す。以下の記述は概説的なものであり、それぞれの世帯の経済状態などによって実際のようなすは異なっている。

れんがを積んで、その上から泥、あるいはコンクリートを塗ってつくった塀が敷地を取り囲んでいる。動物の小屋も同じ敷地内にある。動物の小屋付近の塀は、敷地の裏手か側面にあたることもあり、木や草でつくってあることもある。

敷地の中には、いくつかの小屋と倉庫、家畜の小屋、あるいはシャワー室が配置される。台所用の小屋と男性の寝室となる小屋の最少2つはそれぞれの敷地の中にある。そのほか、その世帯の経済状態に応じて家族の居室や倉庫の数が増える。

敷地内の他の部分の床にコンクリートや石を敷いてある家でも、台所の床は土が露出しており、裸足^{はだし}でここに入る。彼らは外の雑菌を持ち込まないために靴を脱ぐと説明している。敷地内には、台所の屋内の炉以外にも戸外の炉が設けられている。乾季には台所の炉よりも戸外の炉を使用することが多い。

男の居室には木の枠組みにロープを張ったベッドがある。男たちは、ここで寝るだけでなく、座って客と歓談したり、食事することもある。

穀物を蓄える場所は、倉庫が敷地内の独立した構造物になっている場合、男の居室の中に室外の倉庫と似た形状で小型につくられている場合、部屋の一部分が低い壁で仕切られていて穀物が蓄えられている場合などがある。

シャワー室は、小屋になっており、四方の壁と天井がついているものも、水を浴びる場所にコンクリートが敷いてあるだけで、目隠しはそのつど敷物を立てかけるだけのものもある。

小屋の平面形は、円形と長方形があり、屋根は草葺のものやコンクリートを固めた陸屋根とがある（それぞれの詳細については次項を参照）。

個人差が大きいが、塀や扉、窓、屋根の縁などを彩色してあるものもある。屋根に飛行機などの飾りをつけた家さえ見られる。これらはごく一部で、大部分の家は泥、あるいは、レンガの色がそのまま見えている。

調査したのはいずれも町から10～20km離れた農村であるが、いずれの村にも電気は供給されており、台所と、居室のうちの1か所くらいには裸電球が取り付けられている。

3-3 家の分類

ラジャスターン地方の家はその構造から3種類に、平

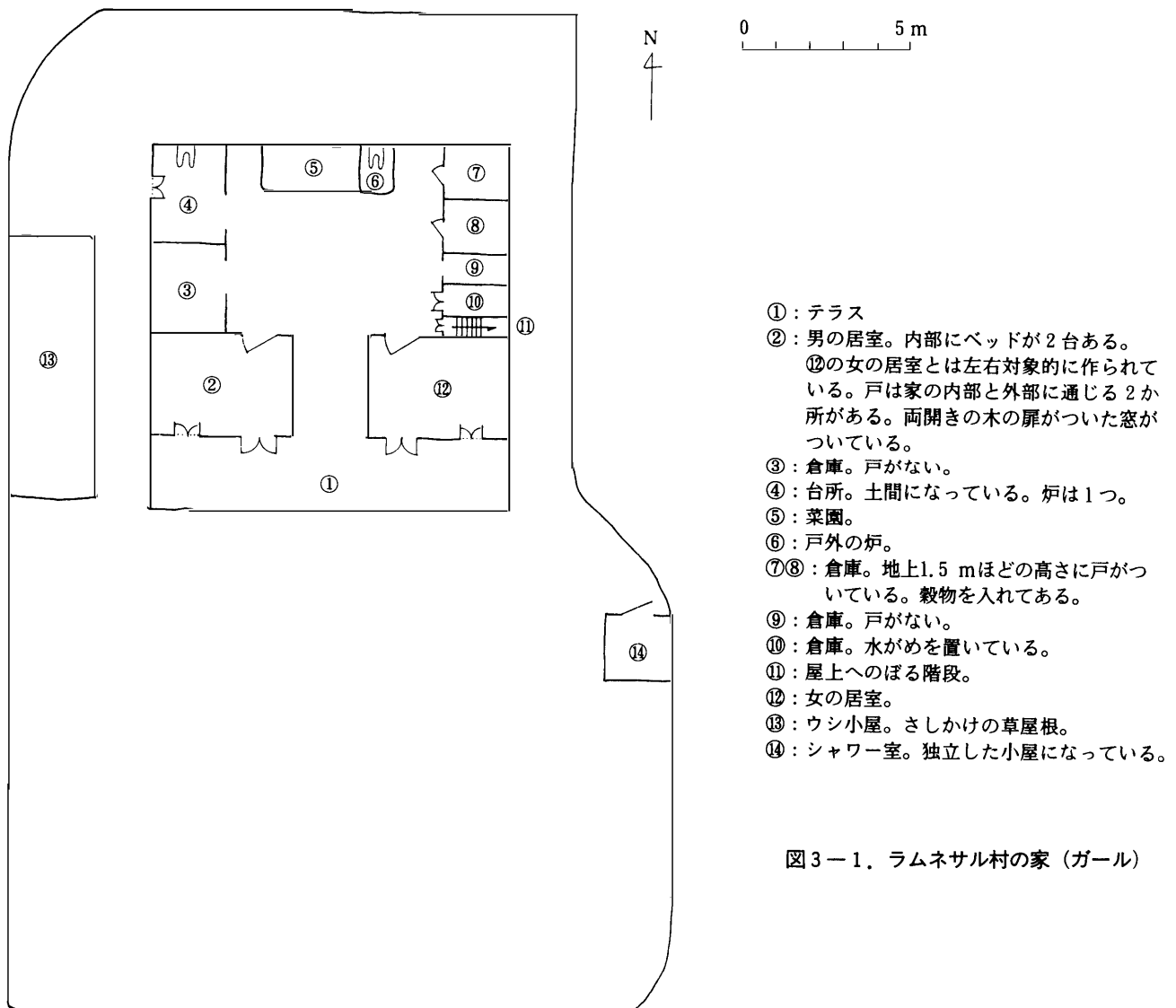


図3-1. ラムネサル村の家（ガール）

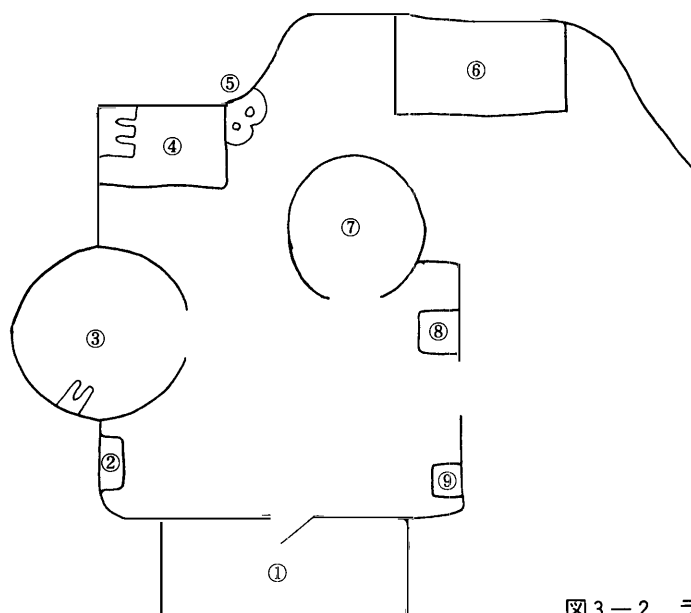
面形によって2種類に分類され、それぞれの名称がついている。平面形による家の分類よりも、家の構造による分類のほうが言及される機会が多い。

はじめに構造による分類では、2階建て以上の家をハベリ haveli と呼ぶ。これは都市部に位置し、軒を接して建てられている。多くは中庭を持ち、壁には絵画が描かれている。平屋建て、陸屋根の構造を持つものをガール ghar, 草葺きの平屋の家をジョンブリ jombli と呼ぶ。ガールとジョンブリは両方とも、れんがあるいは石でつくられた壁を持ち、1つの屋敷地内に混在することもある。この場合には、ジョンブリはキッチン、ウシ小屋、倉庫にあてられ、ガールは居室にあてられることが多い。これらのガールとジョンブリは村に建築されている。

一方、家の平面形による分類では、四角形のものにはチョービタ cho:bita, 円形のものにはゲーラ gera と呼んで分けている。これらは村の建物であるガールとジョンブリについてのみ話題になり、ハベリについては建物全体が四角形を組み合わせた複雑な形をしており、平面形は問題にしない。チョービタとゲーラもしばしば同じ屋敷地内に建てられる。丸い平面形を持つものは必ずジョンブリで、フラットルーフを持つものはない。四角のものは、ジョンブリもガールもある。

		平面形	
		チョービタ	ゲーラ
構造・屋根	ハベリ	—	—
	ガール	○	×
	ジョンブリ	○	○

ジョンブリもガールも簡単に建築して一室だけの小屋



- ①：男の居室。ガール。窓がない。
- ②：神の祠。
- ③：台所。ジョンブリ。土間。炉は1つ。窓、戸がない。女はここで寝る。
- ④：台所。さしかけ式の屋根がつき、炉は2つある。
- ⑤：家畜の餌を作るための炉（2）
- ⑥：ウシ小屋。さしかけの草屋根。
- ⑦：男の居室。ジョンブリ。窓、戸がない。内部を一部穀物庫として使用している。
- ⑧：倉庫
- ⑨：シャワー室。床のコンクリートのみ作っており、壁はない。

図3-2. ライスール村の家（ガールとジョンブリ）

になっていることがある。一方、ガールの場合は室内を複数の部屋に分割したり、入口を複数つけたり、屋上を利用できるようにしたり、テラスを設けたりすることができる。したがってジョンブリのほうがより質素な建物である。このような家の外見によっては、居住者が属するジャーティ（カースト）は分からない。家の外観は、居住者の経済状態を示すのみである。都市部においては中心部はすべてハベリが占め、農村部では、全体の約3/4はガール、残りがジョンブリであった。

3-4 技術

(1) 石の利用

ガールの場合、以下の各所に石が使われる。

- ・窓の木枠の上下
- ・戸口の木枠の上（戸は1枚の片開き、あるいは両開きの2枚で、内側に開くことが多い）
- ・階段の下（階段のきざはしはれんがと土でつくる。この構造を支えるために斜めに石板を渡す）
- ・天井（壁から壁に石の板を渡す。この石を支えるためにビーム（H型鋼）を渡すこともある）
- ・壁の下部（壁はれんがでつくることが多いが、下から数十センチを石でつくることがある。こうすると湿気に対して強いからだという。上に土を塗るので、石が使用してあっても外見上はまったく分からない）
- ・テラス部分の形成（家の前方にテラスを設けてあるのが一般的である。土を盛って高くしてあるだけの家もあるが、石板を敷いてある家もある）

ジョンブリでは石の使用箇所が少ない。高価な素材である石の使用は限定されているのであろう。石の使用がみられるのは、上記のガールの場合のうち、窓の木枠の上下と戸口の木枠の上の2か所のみである。

(2) 石の種類と入手先

ラジャスタン州の北部の調査地域では、建築に用いる石は産出しない。ほとんどの石は、州内の南部地方から購入する。寺院をつくる場合などだけに用いられる大理石は、州内では産出せず、インド南部から運んでいる。石を購入し、建築用に板状、柱状に加工する商人は州内の北部地域にも多数いる。板状に加工する場合は、素材となる岩石のへきかい（劈開）性を利用してくさびとハンマーで加工する。柱状にする場合は電動ののこぎりを使用する。

(3) 屋根

陸屋根の家ガールの屋根構造は3種類に分けられる。木の幹を壁から壁に渡し、隙間には泥を詰めたもの、石板を渡したもの、石板を渡し、その下をビームで支えたものである。これらのうち、後の2つの方法が一般的である。

草葺きの家ジョンプリに用いられる屋根材にはまず長いサニアがある。これは6～7フィートの長さの植物で、加工して長さをそろえたものはパニーという。ピカネールの束にはないため、ピカネールで購入する。1軒分で1,500ルピーかかる。寿命は6～8年ほどである。サニアは束ねて柱状にし、垂木のように使用することもできる。またこれで壁をつくる家もある。サニヤを束ねて丸い壁にそって積み、隙間には泥を詰めるのである。バスケット、ベッド、ロープにも加工される。

アークラは紫色の花が咲き、白い樹液でかぶれる。

バーズラは作物のバズラと同一か不明であるが、5年ほどもつ。

短いサニアはラクダ、ウシ、ヤギの餌にもなる。

これらのうち草の屋根材としては長いサニアが圧倒的に優れている。外観も美しい。ただし、この材料は購入しなければならず、安価に仕上げることができない。地元で入手できるものはアークラ、バーズラである。

屋根材と壁の材料の組合せはつぎの通りである。

	屋根材			
	長サニア	アークラ	バーズラ	短サニア
壁	○			
焼いたれんが	○			
日干しれんが	○	○		
サニア			○	○

(4) 壁

基本的にはすべての家は焼いたれんがで壁がつくられている。日干しれんが、あるいは草だけでつくった家はひじょうに珍しい。未亡人など、経済的に困窮している場合や、家畜の小屋などに利用されているのみである。

焼いたれんが(pakki:n yientu)でつくった壁は30～40年もつので、壁はそのままで屋根だけ葺き替えている光景が、各所でみうけられる。

れんがは専門の職人が村の中にいて製作している。

焼く場所は村の中、あるいは村の近くの便利が良いところで、そこまで材料の土を、ラクダに引かせた荷車で運び、型に入れる作業と乾燥を行なう。十分な数の土の塊ができると低い築山状に積んで、周囲に薪を配置し、燃やして熱を加えてれんがに加工する。こうして出来上がったれんがの価格は、1,000個で450ルピーである。れんがの大きさは伝統的には9×4×4インチであったが、現在はそれよりもやや小さくなっている。壁の厚さはれんがの大きさ3個分、4インチ×3個=12インチ程度になる。

壁は、下部には一部石を使用することもある。その上にはれんがを積み、あいだにつなぎの土(chuna lipai)を入れながら積み上げている。

壁には外側に文様を指で描く場合がある。サジャワティ sajawati と呼ばれるもので、題材としては花、幾何学文様などがとり上げられている。

れんがを使用してつくる家の平面形は、四角形だけでなく、円形の平面形を持つものもある。また、屋根材から分けた、ジョンプリ、ガールの両方の場合がある。

ガールの場合、壁の材料と屋根材の組合せには以下のものがみられる。

		屋根を支える材料		
		石・ビーム	石	木
壁	焼いたれんが	○	○	○
	日干しれんが			○

この中では、日干しれんがの壁と木で支えた屋根が最も質素なもので、ガールもこの組合せか、焼いたれんがと木で支えた屋根であれば、村で入手できる材料のみで建築できる。

実際の組合せの頻度はつぎの通りである。

日干しれんが一木：少ない。

焼いたれんが一木：少ないが上記のものよりは多い。

焼いたれんが一石：屋敷地内の中心的な建物として居室に利用しているものでは最も一般的である。

同一の屋敷地内に異なった組合せが普通存在する。

ジョンプリの場合の頻度は、すでに述べた。

3-5 職人の分業

家を建築する際には以下の種類の職人を手配する必要がある。施主は自分でチェザラ、木工、金工に注文を出す。日雇いも施主が手配する。

チェザラはカーリーガル、メサンとも呼ばれる。呼び

掛けとしてはチャルマ、チャルマジーがよい。壁のれんがを積むなどの左官の仕事をする。その他ベランダ、台所をつくり、家の躯体の建築も行なう。チェザラの頭が部屋の構成について施主と相談する。日当は頭が80ルピー、一般のチェザラは50~60ルピーである。

木工、大工の呼び掛けの名称は surma で、蔑称として kattie, sutar がある。扉とその枠、窓とその枠、ベッドなど木部の加工を行なう。木工と金工は、日当ではなく、出来上がった製品に対して支払われる。

金工は鍵、門扉、部屋の戸、物置の戸などの金属部分の加工を行なう。

日雇いは日当35~40ルピーである。

これらの職人は1年を通して同じ職業についているわけではない。とくにチェザラの場合は6~11月は農民として畑を耕し、12~5月にのみこの職業についている。チェザラとしての仕事のほうが補助的で、生活を主に支えるのは農業である。

これらの職人は村にはどの程度の数いるのであろうか。いくつかの村で例を示す。

ラムレサル村はファテプールの西17km のところであり、400世帯3,000人が住む。金工1世帯、木工3世帯、チェザラ4世帯、れんがづくり20~30世帯である。この村ではチェザラの数が極端に少ない。これはこの村でビリー(タバコの1種)づくりを行なっているため、農閑期の副業として多くの農民は、ビリーづくりか、牧畜に従事している。

グンダン村はファテプールの西15km のところであり、400世帯、3,000人が住む。チェザラ50~60世帯がいる。チェザラはこの村からラムレサル村にも出かけている。両者の距離は2km である。

ライサル村はピカネールの東20km のところであり、150世帯が住む。大工1世帯、チェザラ8~10世帯、純粋な農民80世帯、スィーパー(丁寧には mehatara、侮蔑的には bangi) 15世帯である。

建築に際して施主が購入するものは、セントラルサポート(丸い家の屋根を中心付近で下から支える柱。大工が調達してくる場合もある。小さい小屋の場合は使用しない)、れんが、ビーム、石、らんま(zali、都市のセメント工場で生産している。同様にベランダのタイルも入手される)、屋根材である。

4. まとめ

今回の現地調査はそれぞれ1か月という短期間で、充分なことはできなかったが、いくつかの問題点が明らかになった。それをまとめて今後の課題としたい。

インド・ケララ州では、ブラーマンとナヤール・カーストの家屋にみられる建築理念、建築儀礼、職人の変化などを論じた。建築理念としてとり上げたのは、大地

の神ウァーストプルシャンと八方位の守護神である。これらはインドに古くからあるいわゆる大伝統で、寺院建築や宗教儀礼とも密接に関係している。これらがケララの地でのどのように受容され、誰がどのように実践し、一般の人々にはどのように理解されているのか、伝統建築(家屋、寺院)を理解する上での重要課題である。

建築儀礼については、大工が行なう浄化儀礼、印契、マントラなどがヒンドゥー祭司の行なう儀礼とどのように関係しているのか今後調べていきたい。

建築に関する技術、社会状況もとり上げた。変わりつつあるスケール、材料、建て方、職人の問題は広い意味での文化史の枠組みの中でみていく必要がある。

ネパールでは、とくにサガルマータ山近くに住むシェルパ人を調査対象とした。彼らはチベット仏教を信仰する人びととして知られているが、必ずしもそれとは関係のない天の神ハー、水の神ルー、大黒柱への信仰、亡霊への恐怖にもとづく小さい窓など、彼ら独自の神観念と建築観を持っていることが明らかになった。

もう1つは国立公園の指定と観光化という特殊な社会状況である。これらによって、シェルパの多くは伝統的な生業を放棄し、その結果家屋の材料、サイズ、スケール、職人なども大きく変化した。今後周辺諸民族を巻き込みながらどのように環境適応していくのかみていきたいと思う。

インドのラジャスターン州では、インド砂漠の南縁に位置する乾燥地帯で調査を行なった。農村部では陸屋根か草葺きの平屋建てが、都市部では2階建てがみられることを指摘した。またこの分類と四角形、円形という平面プランとの関係、屋根材(数種類の草)と壁材(れんが、日干しれんが、草)との関係も明らかにした。今回は建築の技術的側面を調べるにとどまったが、今後ケララ州にみられたような建築理念や神観念、社会状況の変化にともなう建築技術や職人の問題などについても調査していきたいと思う。

なお、1、2章とまとめは高橋、3章は栗田が執筆した。

〈研究組織〉

主査	高橋	貴	野外民族博物館
			リトルワールド研究員
委員	栗田	和明	同上 研究員
	渡邊	道斉	同上 研究員